聴者のスポーツ団体に所属する聴覚障がい者のコミュニケーションの実態と課題に関する調査研究

柴崎　一馬

Ⅰ　問題

デフスポーツとは、聴覚障がい者同士で行うスポーツであり、競技は聴者と同様のルールで行っている。また、聴覚障がい者の中でも聞こえの程度は様々であるために、スタートの音や審判の声を視覚的な情報に変えて、合図を出したり、手話やサイン、指文字などを用いたりして競技を進めることが多い(庄司, 2015)。

デフスポーツ活動は、19 世紀末頃からヨーロッパを中心に行われ、日本でも第二次世界大戦前から陸上や野球等の競技が積極的に行われていた(及川, 1999)。デフスポーツの歴史を概観すると1948 年以降の記録では、オリンピックに欧米を中心とした諸国の選手が 10 名以上参加し、その内 5 名がメダルを獲得したことが確認されている(及川,1999)。現在でも聴覚障がい者が一般の競技会や大会にも参加するなど幅広い活動と卓越した競技レベルを持つアスリートの存在も確認できる。このことは、聴覚障がい者の中にも、優れたスポーツパフォーマンスを発揮するものが存在することを示している。しかし、その現実が国内ではほとんど知られていない。

齋藤・荒川(2014)は、聴覚障がい者は聴者の中で孤独感を感じるといわれており、所属するスポーツ団体のメンバーに対して仲間意識を持てることは、スポーツの継続要因として重要であると述べている。また、聴覚障がい児を対象とした特別支援学校(ろう学校)の体育、部活動等では、聴覚障がい者同士でスポーツを行っているが、高校卒業後や社会人となった後では、聴覚障がい者同士でスポーツを行う機会は少なくなると述べている。

聴覚障がい者は四肢体幹に器質的な異常がないため、一般のスポーツと同様のルールで行われ、聴者とともにスポーツを行うことができるが(及川, 1995)、聴覚障がい者は音声情報の入手が困難であり、コミュニケーション方法が違うことから、聴者の集団の中においては孤独感を感じやすい(渡邉, 2013)。聴覚障がい者の社会参加の機会が増え、スポーツなどの余暇活動においても聴者との交流が盛んになっているが、その中でどのようなコミュニケーション上の課題が生じているかは明らかになっていない。

Ⅱ　目的

本研究では現在、聴者のスポーツ団体に所属する、または過去に所属していた聴覚障がい者が練習場面や試合中等の様々な場面において、コミュニケーション上にどのような困難があるのかを明らかにし、そうした困難さを解消するために聴覚障がい者はどのような工夫をする必要があるのかを明らかにすることを目的とする。

Ⅲ　方法

1　調査対象

現在、または過去に聴者のスポーツ団体に所属する、所属していた者で、現在は民間のスポーツ団体（野球、サッカー、バスケットボール）に所属する成人聴覚障がい者(以下:選手)。

2　調査手続き

対象者が所属する民間のスポーツ団体の代表者宛に依頼文と団体に所属している選手の人数の回答票を郵送した。

回答票を返送してもらい、選手の人数分の依頼文を改めて送り、代表者から各選手へ依頼文を配布してもらった。依頼文を読んで、同意が得られた場合、インターネット(URL もしくは QR コード)または、紙媒体に記入し返送してもらった。

3　調査期間

2017 年 8 月～9 月に対象者が所属する民間のスポーツ団体の代表者宛に依頼文と団体に所属している選手の人数の回答票を郵送・回収を行った。

2017年9月～10月末にインターネットおよび質問紙による回答の集計を行った。

4　調査項目

1)フェイスシート

性別、年代、職業、学校歴、失聴時期、現在の聴力レベル(裸耳、補聴機器装用)、普段使用している補聴機器について、スポーツ活動の大会、記録会等や練習時における補聴機器の使用状況やその理由について、普段用いているコミュニケーション方法。

2)現在行っているスポーツ活動の実態

スポーツ種目(現在及び過去)、経験年数、スポーツを行うきっかけと目的、メンバー構成(聴者や聴覚障がい者の割合)、聴者のスポーツ団体に入って苦労したこと等。

3)聴者とのコミュニケーション時の問題

①スポーツ時のコミュニケーション方法

指導者や競技者、チームメイト、友人間の間で用いるコミュニケーション手段について、競技中、練習中に用いるコミュニケーション手段について等

②スポーツ時のコミュニケーションで生じる困難や対処方法

聴者からの支援や働きかけについて、自分自身(聴覚障がい者)からの働きかけについて等

5　分析方法

分析方法は、まず、スポーツ種目群、コミュニケーション手段群に分けて回数の比較を行った。スポーツ種目群では、間やタイミング、コミュニケーション方法が異なってくるため、「野球・ソフトボール(以下：野球群)」、「サッカー・フットサル(サッカー群)」、「バスケットボール(バスケ群)」、の3群に分類して、分析を行った。コミュニケーション手段群は、普段の聴者とのコミュニケーション手段においては、考える必要あり、在籍校の最終歴である高等部(高等学校)を2つのカテゴリーに分けた。「地域の学校(高等学校(きこえの教室もしくはことばの教室、特別支援学級も含む))群」、「特別支援学校(ろう学校)群」に分類し、分析を行った。

6　倫理的配慮

本研究を進めるにあたり、本学倫理審査委員会の承認（承認番号 2017-56）を受けた。

Ⅳ　結果及び考察

1　回収率

団体に所属している選手の人数の回答票を 17 団体に郵送した。回答票が返ってきたのが、15 団体であった。15 団体のうち、225 名分の質問紙(インターネット 174 名、紙媒体 51 名)を郵送したところ、225 名のうち 46 人から回答があった(回収率:20.3%)。46 名のうち、インターネットによる回答は 36 名(78%)、紙媒体 10 名(22%)であった。

そのうち、6 名は本研究における対象となる条件を満たしてなかったため、分析対象数は 40 名となった。

2　スポーツ種目ごとの比較

現在の聴力レベル(裸耳)では、野球群、サッカー群は、両耳とも 91dB 以上の方が 70%以上で、バスケ群は、比較的に聴力が低い方が半数以上いることが分かった。

聴者の指導者、チームメイトとのコミュニケーション手段については、野球群、サッカー群、バスケ群で「読話(口話)」が最も多かった。その理由として考えられることは、野球群、サッカー群、バスケ群は団体種目の為、チームメイトと一緒にプレーすることから、聴者と聴覚障がい者の双方が分かる「読話」が最適な方法になるのではないかと思われる。

どの種目においても、50%前後の人が聴者とのコミュニケーション面で様々な困難を抱えており、試合中の作戦や練習メニュー等の内容がつかめないまま、プレーしている可能性も示唆された。特に試合や記録会において、瞬時の判断・プレーが求められる場合、「手話」や「筆談」、「読話」等では限界があると思われる。また解決法として、アイコンタクトや身振り・手振り等、視覚的な情報を上手く有効活用しながら、プレーしていることが分かった。また各自で工夫してサインを作ったり、手を挙げたりするといった記述も見られた。

聴覚障がい者自ら行うべき働きかけとして、野球群、サッカー群で「手話・指文字を教える」が最も多く、バスケ群では、「口形を大きくしてもら

う」が最も多かった。バスケ群は他の群より聴力が良い対象者が多く含まれていたため、音声や読話を使ったコミュニケーション方法が有効であるため、群間の差が表れたと考えられる(図 1)。
また、どの種目においても 70%以上の人が、聴覚障がい者自身が働きかけていくことが重要であると述べており、情報を得たり、コミュニケーションを取ったりするために、自ら働きかけようと考えている聴覚障がい者が多いことが明らかとなった(図 1)。

3　コミュニケーション手段ごとの比較

地域の学校群では、「読話」でコミュニケーションを取っていることが最も多かった。地域の学校で生活をしていた経験から「読話」を活用することが多かったためと思われる。一方、特別支援学校群では、「身振り・手振り」が最も多かった。これは、特別支援学校で手話や指文字を用いてコミュニケーションを取っていたことから、「身振り・手振り」のように体や手を使って視覚的に伝わりやすい方法でコミュニケーションをとる傾向にあると考えられた(図 2)。

地域の学校群、特別支援学校群どちらも半数以上は聴者とのコミュニケーションに困難があると回答していた。コミュニケーションについて苦労した経験を問う質問項目では、地域の学校よりも特別支援学校の方が多かった。この理由として、地域の学校群は、日頃から聴者と関わる習慣があるが、特別支援学校群では、聴者と関わることが少なく、初めて聴者のスポーツ団体に入団した際、どのように聴者とコミュニケーション取ったらいいのかわからず、困難が生じてきたと考える。また困難があっても、何も解決できなかったというケースも見られた。

「聴覚障がい者からの働きかけは必要だと感じていますか」についての回答ではどの群でも 70%以上が、聴覚障がい者自身が働きかけるべきだと述べていたが、地域の学校群よりも特別支援学校群の方がやや多くなった。この理由として、地域の学校群は、日頃から聴者と関わる習慣があるが、特別支援学校群では、聴者と関わることが少なく、初めて聴者のスポーツ団体に入団した際、どのように聴者とコミュニケーション取ったらいいのかわからず、困難が生じたと考えられた。聴覚障がい者が自ら行う働きかけの質問項目では、地域の学校群では、地域の学校群は「口形を大きくしてもらう」が最も多く、特別支援学校群では、「手話・指文字を教える」、「筆談で対応してもらう」が最も多かった。また、手話や指文字だけではなく筆談や口形、様々なコミュニケーション手段を使って聴者とやりとりすることで円滑にコミュニケーション取れるだけではなく、様々な情報を得ようとしている人がいると考えた(図 3)。

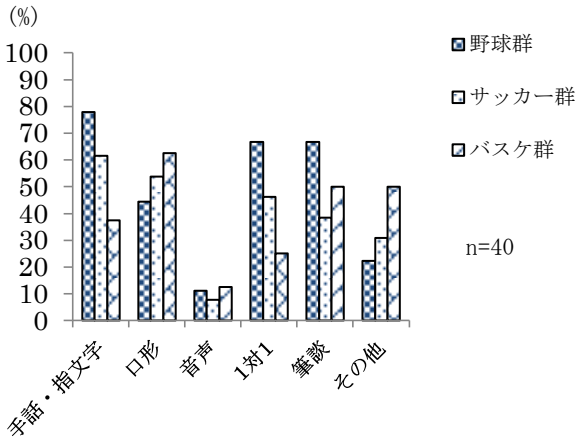

図 1　スポーツ種目ごとの必要と感じる働きかけの内容

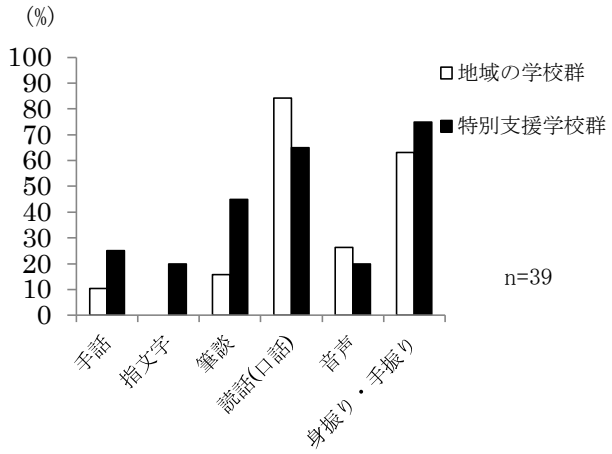

図 2　コミュニケーション手段ごとの大会や記録会等における聴者のチームメイトや友人とのコミュニケーション方法

Ⅴ　まとめ

1　スポーツ種目ごとの比較

練習時に多く用いられるコミュニケーション方法は、スポーツ種目によって異なり、野球群は「身振り・手振り」、サッカー群とバスケ群は「読話」となった。また、コミュニケーションにおける困難さについて、野球群はミーティング等の場面、サッカー群・バスケ群はプレー中の場面における困難さを述べていた。そういうことから、サッカーやバスケなどプレー中にすぐコミュニケーションをとる必要のある種目と、野球のようにあらかじめサインを決めることで対応できる種目とでは、主に用いられるコミュニケーション方法や困難を感じる場面、およびその対応策も異なっていることが分かった。

2　コミュニケーション手段の比較

地域の学校群と特別支援学校群では、スポーツ時に行うコミュニケーション方法、聴者に求める対応策、聴覚障がい者がとるべき対応策も異なっていた。そういうことから、地域の学校群は、聴者とのやりとりに音声や読話などについての対応を述べていたが、特別支援学校群は「手話・指文字」「筆談」「読話」等、様々な方法をとってコミュニケーションを取る様子が見られた。

文献

逸見知美・石村郁夫(2015)聴覚障がい者が感じる聴者とのコミュニケーションの障壁についての面接調査. 東京成徳大学臨床心理学研究, 15, 156-162.

いくおーる編集部(1999)スポーツしようぜ！. ベター・コミュニケーション研究会, 31, 4-7.

桑原信治(2012)障害者スポーツに関する研究―障害に応じたスポーツの指導法― (聴覚障害者バレーボール). 東海学院大学紀要, 6, 69-80.

増山光洋(2008)聴覚障害バレーボール選手におけるスポーツビジョンの研究―デフ全日本男子バレーボールチームの事例―. 育英短期大学研究紀要, 25, 57-66.

内閣府(2006)障害者の社会参加促進等に関する国際比較調査. <http://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/tyosa/h18kokusai/kekka2.html> (2017年1月10日)

中村有紀(2009)デフリンピック選手候補の競技環境と意識に関するアンケート調査報告書. 筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター. <https://www.jfd.or.jp/deaflympics/resources/tsukuba-report.pdf>(2017年1月10日)

及川力(1995)知られざる聴覚障害者スポーツ. Proceedings the 2nd Tsukuba International Workshop on Sport Education, 23-28.

及川力(1999)21世紀における聴覚障害者のスポーツ環境. 戸山サンライズ, 175, 8-11.

齋藤まゆみ(2000)聴覚障害学生の体育実技における視機能の現状と問題点. スポーツ教育学研究, 20, 265-268.

齋藤まゆみ・後藤邦夫・大山卞圭悟(2007)共通体育における聴覚障害学生の現状とサポートモデルの検討. 大学体育研究, 29, 21-28.

齋藤まゆみ・荒川歩美(2014)日本における成人聴覚障害者のスポーツ活動に対する意識とその現状. 筑波大学体育系紀要, 37, 93-99.

庄司美千代(2015)聴覚障害者スポーツ―デフリンピックを中心に―. 特別支援教育(60), 44-47.

白澤麻弓・徳田克己(1999)大学における聴覚障害学生に対するサポートの内容に関する研究. 障害理解研究, 3, 41-50.

渡邉儀一(2013)聴覚障害者からみたスポーツのパースペクティブ―「当事者性」重視のスポーツプロモーションとは―. 筑波大学大学院体育系修士研究論文集, 35, 477-480.

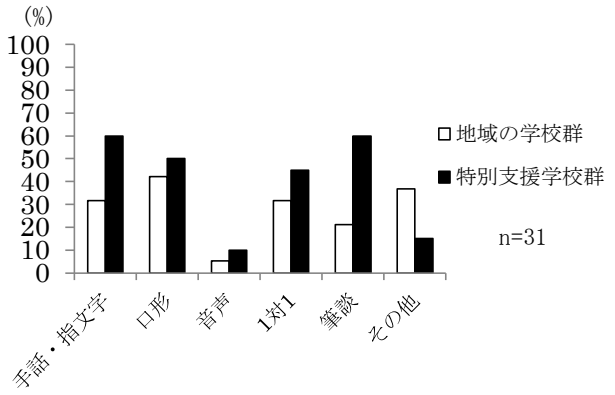

図3　コミュニケーション手段ごとの必要と感じる働きかけの内容